

Editor's eye

・特集・

虫の皮膚病 —疥癬を中心として—

編集担当 浅井 俊弥

今回の特集は疥癬を中心に虫に関連した疾患を網羅した。免疫学的な考察を加えた疥癬の病態や、疥癬に続発する、ないし併発する疾患について、山本が「総説」で述べている。水疱性類天疱瘡、血管炎の症例は今後ガイドラインに示されることになるだろう。疥癬の高齢者施設や療養型病院での集団発生はしばしば生じていて、鎮圧のためには皮膚科専門医の経験と知識が欠かせない。数多くの症例を経験した中村らの「統計」での報告は、イベルメクチン内服とフェノトリン外用の併用療法について考察されていて興味深い。和田の犬疥癬の「臨床例」は一般開業医に多くの示唆を与えらると思う。虫刺症あるいは亜急性痒疹と診断している症例の一部には動物疥癬が含まれている可能性がある。ペットの飼育歴とその皮膚病変を確認すること、ペットの皮膚病治療が必須であること、ペットの治療に用いられている薬剤のヒトへの応用の可能性について知ることができた。

古北の点状紅斑(樋口)に関する考察は、読者にとって新鮮なのではないか。eruptive pseudoangiomatosisという診断名は私にとっても初耳であった。典型的な臨床写真とともに古い論文の解説があるので一読されたい。蔵元はIgA血管炎の経過中に生じたネコノミ刺症を報告した。下腿に生じるpalpable purpuraがすべて血管炎ではないことを示した。蚊が媒介するリケッチア、ウイルス感染症は、急性発疹症をみた際に常に鑑別疾患にあげておき、患者の行動歴を把握する必要がある。高橋は日本紅斑熱を複数経験し、疑うこと、そしてCRP高値の割にはWBCがほぼ正常という臨床検査結果から、確定診断、治療というプロセスを示しており、これも重要な報告であった。コロナパンデミックで国外への渡航が減っているとはいえ、熱帯、亜熱帯でみられる蚊媒介ウイルス感染症には注意する必要がある。とくにデング熱は地球温暖化の影響で、国内での定期的な発生が懸念される。臨床的にはwhite islands in a sea of redがデング熱に比較的特異的とされていて、典型的な皮膚症状が示されているのでご覧いただきたい。